

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第 卷三十五第

月九年六十和昭

## 論 叢

現代世界學としての日本學の根本理念……………經濟學博士 石川興二

支那の田賦整理……………經濟學博士 八木芳之助

企業原理と企業規模……………經濟學士 大塚一朗

資金調整の課題……………經濟學士 中谷實

ロバートソンの四つの係數の理論……………經濟學士 青山秀夫

## 研 究

經濟社會學の基本概念……………經濟學士 北野熊喜男

古代猶太共同體の成立……………經濟學士 澤崎堅造

## 說 苑

ボオル・ベルナルの佛印工業化論……………經濟學博士 松岡孝兒

## 附 錄

彙 報

外國雜誌論題

# 研究

## 經濟社會學の基本概念

北野熊喜男

### 一 方法論的序説

〔I〕 經濟社會學の課題 經濟生活は人間生活における物質的手段調達の部面であり、しかもそれはつねに社會的に、すなはち多數のひとびとの相交渉するうちに實現せられる。かくの如くひとびとがたがひに相寄り相交渉しながら、その生活に必要とする物質的手段を調達するとき、われわれはこれを經濟の社會的構成といふ。しかして經濟の社會的構成については、物質的手段調達においてひとびとの立ち入る社會關係と、かかる社會關係をとほして實現せられる物質的手段調達そのことを、はつきり區別しなければならぬ。前者はいはば經濟における社會であり、後者はいはば社會における經濟である。もとより經濟の研究は經濟學の任務であるが、社會の研究はまさしく社會學の課題でなければならぬ。固有の經濟學は社會における經濟、すなはちひとびとの物質的生活手段調達過程そのものを分析するのであつて、この調達において彼らの立ち入る社會關係はそれみづから直接分析の對象とするものではない。もとより經濟はつねに社會を地盤とし前提とする意味において、經濟學的分析は必ず社會學的事實を重要な與件として前提せざるをえないけれども、與件として前提するといふこと

はみづからこれを分析の對象とするといふことではない。あたかも生産技術の状況の如きも、經濟學はつねにこれを與件として前提せざるをえないけれども、この技術そのものを分析説明することはもとより經濟學の任務ではない。一般に社會關係を分析説明するのは、獨立の特殊的人事科學のひとつとしての社會學にほかならず、經濟に關する社會關係の研究もまた當然社會學の研究課題であつて、ここに社會學の一特殊部門としての經濟社會學を、固有の經濟學から明白に區別しなければならぬのである。經濟社會學が論理上固有の經濟學體系に所属しえざること、あたかも生産技術そのものの説明が固有の經濟學體系を構成するものでないのと同様である。この點の認識は、いまなほあまりにも多い雜炊的な隨想經濟學乃至社會學の科學的な純化のためにも、また從つて、ただしい科學的根據のうへに立つ實踐的知識體系の確立のためにも、きはめて肝要なことといはざるをえない。ただし實踐的知識體系はつねに世界觀を基點として、本來分立的なる諸科學を綜合統括することによつて構成せらるべく、しかも眞の綜合とは分たるべきものが止しく分たれてのちはじめて意味をもちうるのであつて、しからざれば、ただ實踐的想念を中心とする常識の雜然たる未分析的全體たるにとどまるであらうからである。これらの點、すでにしばしばわたしの主張したるところである。<sup>1)</sup>

さて經濟社會學の課題は大別してこれを二つにわかつことが出来る。第一は經濟社會の構造の靜的分析これであり、ひとびとがその物質的生活手段調達においておよそ如何なる關係に立ち入るものであるか、その關係の性質、形態ならびにその相互關係を明らかにし、さらにそれらの關係の複合的常規化としての經濟組織および經濟體制の性質と形態を分析説明するもの、すなはちいはば經濟社會學の靜學的部門にほかならない。しかして第二はかかる關係、組織および體制が典型的には如何なる序列をもつて、如何なる方向に發展してゆくものであるか

1) 經濟社會學についての私見ならびに種々なる見解の批判は、拙稿「經濟社會學序説」(經濟論叢 第44卷第6號、昭和12年6月)および大阪南大編「經濟學辭典」追補版ならびに同小辭典(近刊)における拙稿「經濟社會學」の項目について見られたい。

すなはち經濟社會發展の動的聯關の必然性を明白ならしむるもの、いはば經濟社會學の動的部門にほかならない。もとより靜學的分析は動學的説明への必要なる礎石をなすのみならず、それみづからまた學問の重要さをもつものであつて、靜學的基礎を缺いてただちに動學的課題を論じ、あるひは經濟社會學の任務をただ動學的部門にのみ限定せんとすることに、わたしは賛成することが出来ない。<sup>2)</sup>

かくて本篇においては、わたしはすでに主張せるところに従ひつゝ、まづ經濟社會學の靜學的部門すなはち經濟社會の靜的構造分析について私見の輪廓を明らかにし、やがてこれはつゞく動學的主張への礎石たらしめようとするのである。<sup>3)</sup> 關聯する諸學說の批判はすべてこれを他の機會にゆづるほかないとおもふ。ただわたしの主張は一貫してはゆる「高田社會學」の基準線上に展開せられるといふことは注意しておかねばならぬ。

主要なる學說として顯せらるるものは、古くは

Schäffle, „Das gesellschaftliche System der menschlichen Wirtschaft.“ 卷Ⅱ II. Bd. III. Buch, Der Organismus der Volkswirtschaft.

G. Schmoller, „Grundriss der Volkswirtschaftslehre“ 卷Ⅱ II. Buch, Gesellschaftliche Verfassung der Volkswirtschaft.

A. Wagner, „Grundlegung der politischen Oekonomie“ 卷Ⅱ II. Halbbd. 5. Buch, Die Organisation der Volkswirtschaft.

近頃は

Max Weber, „Wirtschaft und Gesellschaft,“ Grundriss der Sozialökonomie III.

F. Oppenheimer, „System der Soziologie“ III. Bd. 1. Halbbd. 2. Buch, Ökonomische Soziologie.

W. Sombart, „Die Ordnung des Wirtschaftslebens“ 卷Ⅱ 2. „Der moderne Kapitalismus“ Ⅱ 卷Ⅱ 2. „Wirtschaftssystem“  
◎思想。

R. Wiltbrandt, „Oekonomie“ Teil II. Ideen zu einer Soziologie der Wirtschaft.

H. Schack, „Wirtschaftsformen“

O. Spann, „Die vier Grundgestalten der Wirtschaft,“ (,) Tote und lebendige Wissenschaft, (所收)

K. Dunkmann, „Soziologie der Arbeit“

H. Saemann, „Soziologie der Wirtschaft“ (Dunkmann, „Lehrbuch der Soziologie und Sozialphilosophie,“ 所收)

2) わが國における經濟社會學の唯一の實實的企圖ともいふべき高田保馬博士の「經濟社會學の素描」(「國家と階級」所收)は、あまりに動學的取扱に重きをおきすぎてみられるやうにおもはれる。前掲拙稿参照。

3) 本文は次に掲載される「經濟社會の構造分析」と一括して讀まるべきもので、

Goth-Ottilienfeld, „Wirtschaft und Wissenschaft“, „Wesen und Grundbegriffe der Wirtschaft“, „Volk, Staat, Wirtschaft und Recht“ 等に於ける, „Gebilde“ の理論,

又はゆる財政社會學における Goldscheid, Sulan, Jecht 等, 特

H. Ritschl, „Gemeinwirtschaft und kapitalistische Marktwirtschaft“, „Gestaltungsformen und Entwicklungsstufen der Staatswirtschaft“, Schmollers Jahrbuch, 49. Jahrg., „Zur Theorie der staatswirtschaftlichen Entwicklungsstufen“, Festgabe für G. v. Schanz. Bd. I. における經濟組織論などである。

## 〔II〕 科學知と實踐知

なほこの際、本論に入るまへに科學知と實踐知の關係を論じ、經濟社會學の實踐的意義に論及しておきたいとおもふ。けだし經濟社會學はしばしばいはゆる純粹經濟學の抽象性と觀想性、従つてその實踐遊離的性格への批判として要請せられて來たものであるからである。

いふまでもなく、般に人間知識は、本來生活實踐をはなれて意味をもつものではない。それはつねに生活の反省として、また豫料として出發し、しかも結局つねに生活實踐を指導する役割をもつものである。いはば知はつねに行より發し、またつねに行にかへりゆくといはなければならぬ。けれども生活實踐のうちにその端緒をえたる人間の學問的努力は、やがて一應生活との直接的聯關を斷ち切つて自律しようとする要求をもつことも否定することは出來ぬ。直接の生活經驗が相互に撞着し、常識が矛盾におちて、さらに深くまた廣き立場からの理論的整理が要求せられ、知識の學問的體系化が進めらるるにおよんでは、およそ概念は概念としてそれぞれまた相互に論理的整合をもとめ、矛盾なき秩序の形成を要求するに到らざるをえない。ここにおいて學問は生活そのものの實踐的要求から相對的に獨立し、いはば論理そのものの要求に従ひつつ嚴密なる概念の構成とその體系の整然たる統一性を追及しようとする。もとより如何なる學問も絕對的に生活を遊離して成り立つものではないけれ

\* 動的部門は近く「經濟社會の發展段階」として發表する豫定。また國において非常時意識の深刻化と、これにもたな専門學實踐の性急な要求のもとに、各専門學者の専門的領域を超えた素朴な常識論、とりわけ經濟學者の下手な哲學的、社會學的論議や、また哲學者如何にも

ども、或段階においては一應生活實踐との直接のつながりをはなれることにおいて、結局はかへつてその知識としての生活的役割をもよりよく果しうるものとなるのである。しかもこの段階における知識の論理的整理はその對應する事實の部類に應じて、それぞれ概念的統一と體系化の原理を異にし、あるひはまた研究方法を異にし、そこに種々相異なる知識體系を分裂せしめる。いはゆる特殊科學または専門科學の段階すなはちこれである。それぞれの専門科學はいづれも具體的現實のただ一面のみ抽出して取扱ふことにおいて、本質的な現實遊離性を避けることが出来ない。この意味において抽象性と觀想性とはまさに専門科學のもつ不可避的な性格であり、むしろ進んで求められたる性格でさへある。それは直接經驗、常識の具象性と實踐性との否定の面に成立する人間、知識の抽象的、分裂的段階にほかならぬからである。

けれども知は行より出でてまた行にかへる。學は生より發しまた生に歸入する。ひとたび生活の現實と實踐よりひき離された特殊諸科學の成果は、結局ふたたびその抽象性と觀想性とを否定して生活實踐のうちに歸一しなければならぬ。このことは種々なる科學體系において整序されたる知識が、何らかの生活理念に即應してふたび総合統括せらるることによつて可能となる。かくの如き知識の實踐的體系は右の専門科學そのものとはあくまで區別されなければならぬ。如何にも純粹なる特殊科學の生活的意義は結局かかる實踐的知識體系に歸一するにあるけれども、しかし第一、眞に實踐的具象的な知識はそれぞれ抽象的に分立する専門科學自體がひとつひとつとして決して與へうべきものではなく、實踐的要求はつねに必ずかかる専門諸科學の分立の否定、すなはちいはばその適切なる協力をこそ必要ならしめる。いひかへれば特殊科學は分立的であるに對し、實踐的知識は総合的でなければならぬ。しかも第二に、その総合統括の根本原理と實踐的目標判定の價值基準は、これまた特

大風潮きたつてきた。その中、諸國民科學乃至國民科學など世の發展を阻害する。諸國民科學は、私見によれば、日本に於いては、眞に學問的な實踐的知識の發展を阻害する。諸國民科學は、私見によれば、日本に於いては、眞に學問的な實踐的知識の發展を阻害する。と述べている。素人からいひだす知識體系は、素人からいひだす知識體系は、素人からいひだす知識體系は、

殊科學そのもののみづから與へうべき知識ではなく、それは結局何らかの人生觀乃至世界觀を根底とせざるをえない。しかししてこの人生觀乃至世界觀を統一的原理的に確立し、普遍妥當的に解決せんとすることはまさに哲學の課題でなければならぬ。それゆゑ知識が本來生活實踐より出でてやがてまた生活實踐に歸入すべきものであるからといつて、個々の専門科學そのもの立場において、ただちに實踐的知識體系の成立を考へることは甚だしい方法論的誤謬であり、むしろ科學をして科學以前の生活經驗の直接的段階に逆轉せしむるものといはざるをえない。直接的段階の生活經驗はいはば知識の含蓄的全體であり、ここから出發しながら、特殊諸科學はいはばその解明的部分領域として分立し、やがて生活理念による綜合的統一を回復することによつて眞の實踐的なる知識體系が確立されるのである。しかしして後者こそ人間知識のいはば分立を媒介とする解明的全體にほかならぬといふことが出来る。眞の綜合は分たるべきものが正しく分たれてのちはじめてそのうへに成り立つといふのはこのことである。昨今實踐學を唱へる多くの人が、哲學とも社會學とも經濟學とも政治學ともいへないやうな、しかもそのいづれもの學問以前ともいふべき、雜然たる隨想的思ひつきをならべ立てるにとどまつてゐるのは、直接的知識の未分析的全體を眞の解明的全體と混同するものであつて、學問論上斷じて許しがたいことであるといはなければならぬ\*。

〔Ⅲ〕 經濟社會學と實踐的知識體系

經濟學も社會學もとも現實生活における實踐的要求のうち、その學問的體系化の端緒を與へられた。それはいはば經世濟民の綜合的知識として、まづ政治經濟學として出發し、あるいは社會革新の指導理論の綜合的知識として求められた。スミスの經濟學やコントの社會學はその代表的なるものである。けれどもすてにして科學としての體系整序の努力が進みゆくとき、知識は知識としての論理的整

つてその原理としてこ國民  
ま日本社會學者今日の急務  
されなければならぬ  
上にあるべきものである。  
區別されなければならぬ  
専門科學と區別されなければならぬ  
なるべきものである。  
純正なるべきものである。  
あくまでも純正なるべき  
すべく、あくまでも純正なる  
立すべく、あくまでも純正なる

合を求め、相異なる知識體系はおのづから分裂をすすめ、非科學的夾雜物は次第に排除せられ、やがて嚴密なる特殊の専門科學としての經濟學や社會學が純化確立されてくる。いはば純然たる専門科學的知識體系が生活の實踐的要求と離れて、それみづから一應自律せんとするのである。今日のいはゆる純粹經濟學や純粹社會學はすなはちかかるものであり、従つて現實生活の實踐的指導はすでにかくの如く抽象化し専門化せる特殊科學のものをもつてして單獨に果しうべき使命ではなくなつてゐる。ここにおいてかかる純粹經濟學や純粹社會學は、その抽象性と非實踐性をしばしば非難される。けれどもすでに述べたる如く純然たる専門科學の抽象性と非實踐的性格は、むしろ避けがたい性格である。われわれはいたづらにこれを非難してそれらを科學以前に逆轉せしむべきではなく、正しくその學問的地位と限界とを見定めて、そのあるべきところに所を得させ、やがてそれらの正しい協力のうへに立つ實踐的綜合的知識體系への道を用意しなければならない。いふまでもなく、その間、誤れる分化は十分なる方法論的反省をもつて整理されなければならないであらう。けれども無自覺の惡分業を排すといふことはおよそ分業を排するといふことではなく、いはんや混沌たる全體にかへるといふことではない。正しい分化を自覺的に徹底することをとほして、はじめて眞に科學的基礎に立つ綜合的實踐知を確立することが出来るのである。

かくして經濟生活の實踐的指導の任務も、單に一専門科學としての理論經濟學にあまりにも性急に強要することは、まさに方法論的無知の證左である。何よりも經濟學そのものは經濟生活の實踐的目標判定の價值理念をおたへえないし、また經濟に關する社會的組織および體制の性質と發展を解明しえない。經濟の生活理念を追及し實踐的價值基準を確立することは哲學的研究の課題であるし、經濟組織および體制の性質と發展を解明すること

4) 會學年報「第3輯」はまさに適切なる教訓である。もろんそれが經濟哲學または經濟社會學としてすでに十餘なるものであるといふわけではない。特に經濟社會學としては、近く別の機會に十分立ち入つて批判しなければならぬと考へてゐる。



は社會學的考察の任務である。少くともかかる哲學的研究や社會學的考察の十分なる補充を缺いて、固有の經濟學よりただちに實踐的知識體系を導き出すことは出来ない。ゴツトルのいはゆる、經濟學も固有の理論經濟學に代るものであるかの如く主張されてはゐるものの、私見によれば、むしろその實、一種の哲學的主張と社會學的分析をもつて、固有の經濟學を補充すべき意義をもつものとみるべきである。<sup>4)</sup>従前から經濟社會學といふ名稱もまた多くは抽象的經濟理論への非難とともに、それに代るべき野心をもつて主張されてきたのであつて、昨今またしばしば經濟學と社會學との協力または綜合による現實性と實踐性の回復の方向に、その名稱が唱へられてゐるのである。<sup>5)</sup>もちろんすでに明らかなるやうに、わたしは決してかかる協力または綜合の重要性を否定するものではない。けれども何故にかかる綜合の方向を社會學と見るのであるか。それは結局何らかの綜合社會學的立場に立つものであり、純正なる専門科學としての社會學を知らざる立場である。わたしは右に論じたる學問論的立場から、およそ綜合社會學の科學性を認めえないがゆゑに、むしろ純正なる専門科學としての經濟學と社會學との自覺的分立徹底の方向に、經濟社會學の道を求めてきたのである。わたしの經濟社會學は特殊的社會科學としての社會學の一部門として、あくまで純正なる専門科學の道を歩まねばならぬとおもふ。かかる分立徹底の道をとほしてのみ、また逆に眞に総合的な實踐的知識體系の確立を媒介することも出来るのである。經濟哲學（とくに經濟倫理學と經濟社會學と純粹經濟學との嚴密なる自覺的分立と、それらの相互的補充協力によつてのみ、はじめて經濟指導の實踐的知識體系が正しく構成せられうるであらう。<sup>6)</sup>わが經濟社會學の學問論的地位はまさにかくの如きものである。

いづれにせよ經濟社會學は單なる掛け聲にとどまつてはならない。いはゆる方法論的學風の致命傷はつねに美

5) フランスのデュルケイム學派の經濟社會學がその代表的なるものである。近くは Löwe の如き、經濟學と社會學の交流乃至協力による現實化を求めてゐる。(Economics and Sociology 1935, p. 19以下) それらの批判については前掲拙稿をみられたい。わが學界近來の快著、高島善哉氏の「經濟社會學の根

辭麗句や大聲叱咤の掛け聲にとどまるといふことである。問題はそこに如何なる實質的内容を提示するかといふことになければならぬ。いまやわたしは、試論的ではあるが、とにかく經濟社會學の内に立ち入つていささか分析の歩みを進めたいとおもふ。

## 二 經濟の社會的構成

〔I〕 經濟的協働—分勞と分益— 經濟の社會的構成はこれを全體としてみるとき、つねに物質的生活手段調達に關する協働にほかならぬといふことが出来る。けだし一般に協働といふのは、ひとびとの活動が共通の效果にむかつて相關する状態を意味し、經濟の社會的構成にあつてはひとびとの活動が物質的手段の調達といふ共通の效果にむかつて相關してゐるからである。かかる經濟的協働において、ひとびとは彼らの最も根本的な生活環境としての自然のうへにはたつきかけ、その與へる抵抗または障礙とたたかひながら、その必要とする物質的手段をととのへる。それゆゑ經濟の社會的構成の根底は、つねに對自然的な人間勞働の社會的相關のうちにあるといはれるであらう。いまかかる人間勞働の社會的體系を「分勞」とよぶとすれば、すなはち分勞こそはあらゆる經濟社會の根底であつて、およそ分勞を缺く經濟社會なるものは存することがないであらう。<sup>6)</sup>

けれども經濟活動は人間生活における物質的手段の調達であり、物質的手段の調達といふのは物質的手段がそれぞれ何らかの生活目的にむかつて使用されうべき状態にもたらされるといふことである。従つてそれは單に財が財としてつくり出されるといふことのみではなく、つくり出された財がさらにこれを使用すべき主體の手に達し、それぞれその目的にむかつて利用される状態におかれなければならない。すなはち分勞のうち社會的に

6) 本問題」もまた結局同様の方向に經濟社會學を求めてゐるとみうるであらう。同様の見方は L. von Wiese „Wirtschaftstheorie und Wirtschaftssoziologie“ Schwollers Jahrbuch, 60, 6, S. 12, ff. 参照。なほ近頃わが國では大熊信行博士の「政治經濟學」の展開が博士の廣き科學的理解のうへに立つかかる實踐知

生産せられた財乃至財の利用は、これを必要とするもの手に何らかの仕方ではわかちとどけられなければならない。社會的生産物はまた社會的に分配せられ、分勞の成果はいはば分益されなければならないのである。ひとびとは一方社會的生産を分擔するとともに他方その成果を分受する。この分勞と分益とこそまさに經濟の社會的構成のつねに缺くことの出来ない二重の機能的構成であるといはなければならない。<sup>8)</sup>

もとよりここに協働といひ、分勞分益といふも、それはあくまで客觀的に實現せられてゐる機能に注目してゐるにすぎない。それはつねにかかるものとして明白に認められべき現象形態をとるわけではなく、また必ずしも關係主體によつてかかるものとして意識されてあるわけでもない。いはんや何びとかの手によつてかかるものとして計畫的に按排されてゐるとはかぎらないし、またそれは關係主體のすべてにとつて公平であり平等であるといふでもない。きはめて不明確な形をとつて隠然と機能するにとどまることもあれば、また無意識無計畫のうちにも存立することもはなはだ多く、關係主體の關係態度も種々なるものでありうるであらう。これらの點はのちに詳論する。

## 〔Ⅱ〕 經濟關係の基本分析

さて經濟的協働はこれを分析すれば、ひとびとがその生活に必要なとする物質的手段の調達において立ち入る種々なる社會關係から構成せられてゐるものである。かくの如き、ひとびとがその物質的手段調達において立ち入る社會關係をわたしは經濟關係と稱する。およそ一般に社會關係といふのは、ひとびとの他人にむかへる態度の相對向し相關聯せる状態であり、かかる對人的態度の對向的相關は、まづ第一にその方向において吸引的なことあり、拒否的なことあり、また上向下的なことあり。すなはち結合關係、分離關係および上下關係これであつて、經濟關係についてもまた根本的にその三方向をわかちうるであらう。ま

への綜合の試みとして期待される。ただ何故なほ經濟學の名に執着されるのであらうか。その配分原理が一般に擴充されたやうに、すでに博士の綜合的體系そのものも經濟學の領域など踏み越えてゐるはずである。

7) Adam Smith がその „Wealth of Nations“ を „division of labour“ から出

た第二におよそ社會關係はその成立の動機において二つの相反する契機を内在するものである。一つは關係そのものをそれ自體のゆゑに存立せしめんとする契機であり、他は關係そのこと以外に存する目的のために關係を存立せしめんとする契機である。感情的乃至因習的因子は前者であり、目的計慮的因子は後者である。前者はまた社會關係存立の非合理的契機であり、後者はその合理的契機であるといふことも出来るであらう。如何にも非合理的契機こそつねに社會關係存立の基底をなすことは否定出来ないけれども、またまつたく合理的契機を缺く人間關係の存立も考へることが出来ない。およそ社會關係はつねにかかる背反的なる二つの契機のいづれをも缺きうるものではなく、必ず兩契機の對立の統一のうへに存立するものといはなければならぬ。ただそのいづれの契機が優位的に作用してゐるかに従つて、主として非合理的に決定されてゐる關係定型と、主として合理的に決定されてゐる關係定型とは區別する必要があるであらう。<sup>5)</sup>

經濟關係といふものは、本來ひとびとが生活に必要とする物質的手段にかかはりながら他人にむかつて何らかの態度をとり、その態度が相對向し相關聯しあふことによつて成立するものである。そこではつねに物質的手段に關するいはば對物的動機を缺くことをえず、これを缺いては他の何らかの社會關係はありえてもいまだ經濟關係はありえないであらう。といふことは、經濟關係にあつては對物的動機がつねに關係の合理的契機として作用してゐるといふことである。しかしてそれ以上ではなく、従つて必ずしも經濟關係においてはつねに對物的動機が對人的態度を決定してしまふといふわけではない。むしろ對物的動機は如何なる場合にも非合理的關係契機を地盤とすることなくして、決して人間關係としての經濟關係を成立せしむるものではない。しかしこのこともまた逆に經濟關係においてつねに非合理的契機が對物的態度を決定してしまふといふのでもない。二つの契機はい

か地入なかとは見地立ちすぎたKoopration増進の分析であり、生産力の分析が主として合理的意義をもつたことが主として合理的意義をもつた。ただその説明があまりに表面的で、興味深い。F. Oppenheimerの經濟社會學の生成の說明が、その分勞の生成の說明である。根本的事實を發せられたことと、その分勞の生成の說明である。ことに殘念である。

つても相伴つてはじめて經濟關係を存立せしむるのであつて、ただそのいづれが優位的に作用してゐるかに従つて、いはば非合理的な經濟關係と合理的な經濟關係との定型を區別すべきであるとおもはれる。しかもそれらはそれぞれ結合的、分離的、上下的なる三方向にわかれたるであらう。たとへば血族團體における感情的に決定されたる經濟的協力や、隣人間における因習的に決定されたる贈答(互與)の如きは、非合理的なる結合的經濟關係の代表的なるものであり、また自己利益の打算にもとづく交換や、共同利益の計慮を基礎とする經濟的協力の如きは合理的な結合的經濟關係の典型的なるものである。同様に争闘にもなはれる物財の争奪は非合理的な分離的經濟關係とみらるべく、經濟的利益のために起される競益利争の如きはまさに合理的な分離的經濟關係にほかならぬといふことが出来る。上下的關係については後に論じよう。

## 〔Ⅱ〕 經濟組織、經濟組織體および經濟組織圈

かくの如き種々なる經濟關係が複合し常規化し、持續的に經濟的協働を存立せしむるとき、そこに經濟組織ありといふ。およそ社會組織といふのは協働の常規的なる仕組にほかならず、經濟組織はすなはち經濟的協働の常規的なる仕組であつて、これを分析すれば種々なる經濟關係の複合と常規化より成り立つものといふことが出来る。もとより種々なる經濟關係が複合し常規化するとはいふものの、そこに經濟的協働を持続的に存立せしむるがためには、必ず何らかの結合的經濟關係が中心となるはずであつて、分離的關係はただそれを破壊せざる範圍においてのみその構成分子となるものであり、またそのうへに上下的關係が加つて協働に種々なる色彩をあたへ、またその持續的なる秩序を維持するのである。

しかしてかかる持續的なる經濟的協働従つて經濟組織の存立は、いふまでもなくひとびとの持續的なる集結を豫想するであらう。ひとびとのまとまりある集結の状態はすなはち集團とよばれうるけれども、およそ集團には

を中心として議論を展開し、經濟社會の構造をその發展の系列において論究してゐるのである。(a. a. O. S. 245 ff.)

- 8) 分勞と分益といふ機能的分析については、作田莊一博士「自然經濟と意志經濟」以下參照。この書は多くの勝れたる獨特の經濟社會學的分析を含む。

一時的なるものあり、持續的なるものあり。一時的集團(たとへば群集、會衆の如き)<sup>11)</sup>はいまだ常規的なる協働を成立せしむるものではなく、經濟組織もまたもとより持續的なる集團を豫想する。ただし持續的なる集團といへどもその集結の統一性と持續性が成員の集團全體に對する意識的結合すなはちいはゆる積分的團結によつていはば積極的に確立せられ、これにもとづいて協働の常規的編成の行はれてゐる場合と、さうではなく單に主體相互の連結關係すなはちいはゆる微分的連結の常規的存立が、いはば消極的に認定せられるにとどまる人びとの一定範圍たる場合とが區別さるべきであらう。前者はすなはち社會團體であり、後者はすなはち社會團または社會範圍にほかならない。<sup>12)</sup>經濟組織についてもまた團體の積分的團結にもとづいて經濟的協働の常規的編成の行はれてゐる場合と單に經濟的連結關係の複合的常規化によつて特定範圍の經濟的協働の機能が持續的に認定せられうるにとどまる場合とが區別せらるべきであらう。ここにはかくの如く經濟的協働を常規的に編成してゐる社會團體を、經濟組織體とよび、また經濟的協働の常規的存立が認定せられうべき社會團を經濟組織團または簡單に經濟團とよびたいとおもふ。家族、國家、會社の如きは前者であり、市場や貿易團といふが如きは後者の代表的なる例である。

〔Ⅳ〕 經濟組織體の生成と構成——基本經濟組織體と派生經濟組織體—— 經濟組織體すなはち經濟組織を存立せしめてゐる團體そのものは、必ずしもつねに經濟活動を目的として結成せられたるものとはかぎらない。むしろ血縁または地縁を基礎として、人間のいはば生來的な集結傾向によつて自然的に生成せる團體において、おのづから經濟的協働の常規化のともなはれきたるものが、むしろ基本的なる場合である。もちろん純然たる經濟的活動のため意識的に團體が結成せられ、そこに經濟的協働の常規的編成の行はれる場合もあるであらうし、また經濟

9) 高田博士、社會關係の研究、240頁以下、特に 257, 282—6頁參照。Tönnies の Gemeinschaft と Gesellschaft の概念はそののちいろいろに解釋され、また修正せられてゐるが、結局結合における上の如き二つの基本定型の區別であると解することが出来るであらう。

活動以外の何らかの生活目的の類似乃至並行にもとづいて結成せられる團體において、經濟的協働の常規的編成のともなはれきたる場合もまたすくなくないであらう。家族や國家の如きはいふまでもなく第一のものであり、組合や會社の如きはすなはち第二のものであり、宗團や學校の如きはまさに第三のものである。すべての社會的構成がさうであるやうに、經濟的社會的構成についても、もつとも根底的なるものはすなはち第一のものでありこれこそいはば經濟社會の一般的基底であつて、他の二者はそのうへにつけ加へられたものとどまるといはなければならぬ。この意味において第一のものを基本經濟組織體と稱し、他の二者を派生經濟組織體とよぶことも出来るであらう。また前者はいはば自然的に生成せる經濟組織體であるといふ意味において生成的經濟組織體とよび、後者は目的意識的に構成せられたる經濟組織體であるといふ意味において構成的經濟組織體とよぶことも出来る。もとより後者のうち經濟にとつて特に重要なものは經濟活動のために構成せられたる組織體であるといふまでもない。<sup>10)</sup>

#### 〔V〕 一元的編成と多元的編成—經濟體制の本質

つぎにまた經濟的協働は單一の經濟組織體をもつていはば封鎖的自足的に編成せられ、他の經濟組織體とは何ら常規的なる聯絡を有せざる場合もあるが、通常多くの經濟組織體が相互に常規的なる聯絡を形成し、いはば多元的にそれらの複合のうへにさらに高次の經濟組織體乃至組織圈を重疊せしむるものである。前者はいはば經濟社會の一元的編成であり、後者はその多元的編成にほかならぬ。經濟社會の多元的編成にあつては、高次の複合的經濟組織體乃至組織圈とその構成分子となる部分的經濟組織體とを區別しなければならぬ。もともと經濟組織圈なるものが重要さをもつのは部分組織體相互の聯絡のうへに成り立つ複合的組織圈としてである。もとより多元的編成は幾重にも複雑に組みかさねられ、複合的組織體

10) 社會學における組織の概念は通例はただ有意的計費的組織のみ指すものである。高田博士「社會學概論」233頁以下、同「社會と國家」133頁以下、特に138—9頁参照。ここにいふ組織の概念はそれよりも廣い。それは經濟學者にひろく行はれてゐる組織概念をとり入れようとしたからである。

乃至組織間相互の聯絡のうへにさらに高次の複合的組織體乃至組織間を組みあけることも多いであらう。その包括的なる全體はいはば包括的經濟組織體乃至組織間とよばれるべく、最終の構成單位となるものはすなはち單位組織體とよばれるべきであらう。<sup>14)</sup>しかしてその中間に多くのいはば複合的にしてかつ部分的なる經濟組織體乃至組織間が存立するといふべきである。従來一部の經濟學者によつてここにはゆる包括的な、しかも經濟組織間のみが經濟組織とよばれ、單位經濟組織がすなはち經濟單位とよばれ、ただその兩者のみ注目されてきたものの如くである。<sup>15)</sup>「經濟體制」といふ用語は、廣義においてはわたしのいはゆる經濟組織と同じ意味にも用ひらるべきであらうが、より嚴密には、むしろここにいふところの多元的なる經濟社會のいはば立體的なる編成の様式を指すものとするのが、もつとも適切であるといひうるであらう。すなはちそれは經濟組織のさらに複合的な組織の全體としての編成の仕組を指すのである。<sup>16)</sup>この意味においてはまさに經濟體、性質、形態および相互聯絡の分析こそ、わが經濟社會學の中心的課題であるといはなければならぬ。

わたしは、つづいてこの經濟體制の分析にさらに立ち入らうとおもふ。

- 11) 小松堅太郎氏、社會構造の理論<sup>7</sup> 289頁以下、特に 295—9頁参照。
- 12) 米田庄太郎博士、現代人心理と現代文明<sup>7</sup> 85—6頁。高田博士、社會學原理<sup>7</sup> 642頁以下、小松堅太郎氏、前掲書 307頁以下。
- 13) 基礎社會と派生社會(高田博士、社會學原理<sup>7</sup> 937頁以下)あるいは生成社會と組成社會(小松氏、前掲書 325頁以下)の區別を参照せよ。Gottl の Urgebilde と Zweckgebilde の區別もまたこれに類する。„Wirtschaft und Wissenschaft“, II. Bd. S. 943 ff. 乃至 Max Weber における Wirtschaftlich orientierter Verband の區別、特に (a) wirtschaftender Verband と (b) wirtschaftsverband との區別は、この際注目し直しよう。„Wirtschaft und Gesellschaft“, S. 87-8.
- 14) Gottl の Ingebilde と Umgebilde との區別がこれに類する。(a. a. O. I. Bd. S. 206), ただし本文で經濟組織體を部分的とか、複合的とか、包括的とかいつても、それはただ經濟的協働の機能的編成に注目してゐるのであつて、團結そのものにおいて部分的なるものが複合されたり、包括されたりするといふのではない。
- 15) 代表的な例は福田徳三博士にみることが出来る。(同博士、經濟學全集、第1巻、1002頁以下、1267—8頁参照。)
- 16) これに類する體制概念は小松氏、社會學概論<sup>7</sup> 128頁にみられる。なほ「體制」概念の由來などについては、拙稿、經濟體制論<sup>7</sup> (和歌山高商、内外研究<sup>7</sup> 第14巻第1號)に詳論した。